

## P13-1 脳幹梗塞左片麻痺患者に対する起居動作への介入 ～急性期から肩甲帯・体幹機能に着目して～

○立花 裕理(たちばな ゆり), 田實 裕嗣, 服部 裕介  
姫路中央病院 リハビリテーション科

Key word : 急性期, 起居動作, 肩甲帯・体幹機能

**【目的】**脳卒中患者急性期において起居動作に介助を要し、病棟内での活動範囲に大きな制限が生じることが多い。そのため、今回、脳卒中患者の肩甲帯・体幹機能に着目した結果、起居動作の介助量を軽減できた症例を経験したためここに報告する。

**【症例紹介】**本症例は、脳幹梗塞を発症し、左片麻痺を呈した80歳代女性である。初期評価時(発症5病日)は片麻痺12段階機能テストでは上肢Ⅳ-I、下肢Ⅳ-I、手指グレード6であり、Motricity Indexは5.5点であった。Trunk Control Test(以下、TCT)は12点であった。筋緊張は、背臥位で両側頭頸部伸筋群・両側腰背部軽度亢進、左肩甲帯周囲・腹筋群低下、座位では頭頸部伸筋群軽度亢進、腹筋群・左腹筋群・ハムストリングスは軽度低下。左上肢のプレーシングは、肩甲骨の前方突出不十分で正中位で保持困難、左右下肢は挙上困難であった。介助下での座位アライメントは、頭頸部伸展位、体幹左側傾斜、円背、骨盤左側後傾位であった。起居動作は頭頸部右回旋し右手で左上肢をリーチさせ側臥位へと移るが、左肩甲帯が後退し上部体幹右回旋が不十分だったため全介助が必要な状態であった。Barthel Index(以下、BI)10点であった。治療目標を起居動作の再獲得と設定し、起居動作中に必要な筋出力の向上のために肩甲帯・体幹機能への介入を中心に行った。

**【説明と同意】**本症例はヘルシンキ宣言に基づき、発表の趣旨を十分に説明し同意を得た。

**【経過】**発症後2病日目に梗塞巣の急性増悪があったため、離床に対して消極的だったが肩甲帯・体幹の筋緊張低下に対して上下肢のプレーシングや肩甲骨の前方突出位から肩甲骨外転位へ自動介助で運動を実施した。また、座位練習で後方介助により重心を前後移動しその際、頭頸部屈曲を促した。7病日目から座位保持が可能となり介助下で平行棒内立位練習を開始した。12病日目では、寝返り見守り、起き上がり軽介助で実施可能となり、15病日目に回復期病棟へ転棟となった。回復期病棟入棟時、片麻痺12段階機能テストでは、上肢Ⅳ-II、下肢Ⅳ-II、手指グレード7であった。Motricity Indexは6.5点であり、TCTは36点であった。筋緊張は、背臥位で頭頸部伸筋群・左腰背部軽度亢進、左肩甲帯周囲・左腹筋群低下。座位で頭部軽度亢進、腹筋群低下、右腰背部亢進。左上肢プレーシングは肩甲骨前方突出位で保持可能と

なり、右下肢挙上保持可能となった。座位は見守りで可能となり、アライメントは、頭頸部正中位、体幹軽度左側傾斜、円背、骨盤左側後傾位であった。起居動作は頸部右回旋・屈曲させ右手で左上肢をリーチさせて寝返りまで可能となった。右 on elbow で push up するが骨盤が後退し体軸内回旋が生じないため軽介助が必要な状態であった。BIは25点であった。

**【考察】**本症例の起居動作の主要な問題点は、体幹機能低下に伴う頭部コントロールの不良だと考え、その原因として肩甲帯周囲、それに伴う外腹斜筋の筋緊張低下を挙げた。起居動作は体幹機能と関連が強いと言われており(八谷、2011)、さらに頭部の挙上に続き肩甲帯の安定性・連動が必要である(金子、2018)。そのため、肩甲帯・体幹に着目し治療介入を行った。

肩甲帯に対して、頭頸部の運動の土台は胸郭が存在しており、頭頸部の動きにとって胸郭の安定性は重要であると述べている(後藤、2016)。前鋸筋の遠心性収縮や広背筋の求心性収縮を促し起居動作時に必要なリーチ側肩甲骨外転位保持のための安定性を高めた。その結果、肩甲胸郭関節運動により肩甲骨周囲の筋の出力を高めたことで、肩甲帯の安定性が得られ頭部コントロールが向上したと考えた。次に体幹に対して、前鋸筋下部線維が働くためには同側外腹斜筋の活動が必要だと述べている(三浦、2012)。早期より内外腹斜筋・腹横筋を高めるため座位・立位を促した。不安定な座位では頭頸部の代償が入りやすかったため、セラピストにもたれさせて骨盤の前後傾を誘導することで腹筋群の活動を高めることができたと考えた。その結果、腹筋群の筋出力を高めたことで右 on elbow で push up するための体幹の安定性が向上したと考えた。これらの治療により、肩甲帯・体幹機能向上により頭部コントロールが改善され起居動作の介助量軽減に繋がったと考えた。

**【理学療法研究としての意義】**脳卒中片麻痺患者において急性期から起居動作を中心に介入することで代償動作の少ない起居動作に繋がったことが示唆された。